

プロジェクト名	宗像大社便殿襖絵の保存修復および再現模写に関する基盤研究		
プロジェクト期間	平成 22 年度		
申請代表者 (所属講座等)	松久 公嗣 (美術教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし
取組方法および 取組実績の概要	<p>具体的な研究対象として、本学と連携体制をとる宗像大社便殿襖絵を取り上げ、その作者である福永晴帆に関する美術史的研究として、鎌倉に在住のご子息への取材と資料の収集をおこなった。また、科研費申請内容となる作品の保存修復に向けた基盤研究として、大学院生を中心とした再現模写をおこない、基底材や画材、技法に関する経験知の獲得を図った。</p> <p>実施計画 (1) ～ (6) に対し、(1) ～ (4) の美術史資料収集と再現模写に係る実践は、各寺社への取材を除いて予想を上回る成果を得た。各寺社への取材が不足したのは、作家に関わる資料が多く入手できたため、早急にその解説をおこない研究対象を精査することを重要視したためであり、予想外の収穫による前向きな変更といえる。(5) の鑑賞教材としての活用方法の試行に関しては、収集した作品を用いた実践をおこなっているが、再現模写の完成を3月に予定していることから、これを用いた実践は4月以降におこなう。</p> <p>(6) の学会における成果の発表については、今年度成果の取りまとめをおこない、当初の計画通り、来年度の関係学会における発表の準備を進めている。</p>		
研究成果の概要	<p>1) 作者【福永晴帆】に関する美術史的研究 鎌倉在住のご子息に対する取材によって、伊藤博文をはじめ当時の交流関係を示す写真資料を入手し、ご子息の記憶が裏付けられた。また、古墨や古硯の収集家でもあった晴帆による水墨作品が多数提供された。これによって技法の解明と墨色の特定が可能となった。さらに画論及び社説などの写しを発見できたことで、当時の時代背景を含めた思想を明らかにする資料を得た。この貴重な資料の発見によって、本プロジェクトの計画を一部修正し、この解説に力を入れ、すでに読み下しを終えている。</p> <p>2) 作品の変遷に関する研究 すでに当時の文書から檀原神宮、熱田神宮などにも作品が収蔵されている可能性を把握できているが、本プロジェクトでは御室仁和寺の作品に関する資料収集にとどめ、上記新資料の解説を重視して、他の寺社に対する取材は今後の課題とした。</p> <p>3) 「宗像大社襖絵画損傷状態調査および保存処置および修理に向けての所感（尾立）」(2008) に基づいた保存修復に関する基礎的調査 再現模写の制作を通して、上記所感の妥当性を確認した。</p> <p>4) 保存修復ならびに再現模写に関する技法と素材の研究 日本画研究室ならびに油彩画研究室に所属する大学院生・学部生による再現模写の実践によって、琳派と四条円山派を融合した技法による制作が確認できた。基底材となる紙に関しては、教員と学生の仮説に隔たりがあったが、本プロジェクトでは学生の力量形成も意図しており、学生による仮説を基に制作を進めている。3月に完成予定であり、この成果を基とした本格的な保存修復の計画の策定と科研費申請の改善を考えている。</p> <p>5) 鑑賞教材としての活用方法の試行 赤間小学校における体感型鑑賞教育の実践において収集した晴帆作品の鑑賞をおこない、宗像大社に対する興味を高めることができた。再現模写の作品を活用した鑑賞教育プログラムは4月以降の実践によって進めていく。</p>		

<p>6) 研究成果の学会発表, 論文の投稿 昨年度までの研究成果に本プロジェクト成果を合わせて, 当初予定通り来年度関連学会において発表を予定している。 これらの成果によって, 作品の再現模写という実践的な研究対象と手法を用いた近・現代日本画の成立過程の検証が可能となり, 大学院を中心とした学生の研究レベルと質の向上が可能となった。西洋絵画ならびに日本(東洋)絵画の比較研究および日本の美術教育に及ぼした影響などに関する研究を進めており, 近代日本絵画の成立と美術教育への影響とその変遷をまとめ, 図工科や美術科で扱われる鑑賞作品に関する検証へと繋げることで, 今後の美術教育の発展に資するものとする。また, 宗像大社等の世界遺産登録への機運や地域住民の関心が高まるなか, 地域の文化財の保存と活用を通して, 研究成果を社会に還元できる仕組みの構築を目指す。</p>			
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法について			
外部資金獲得申請(予定)	科学研究費補助金	研究成果の公表方法(予定)	国内学会で発表予定